

トロイメライ

- 第一夜・緑の森にて
- 第二夜・月の夜
- 第三夜・図書館
- 第四夜・鏡
- 第五夜・人形
- 第六夜・仮面劇
- 第七夜・夜汽車
- 第八夜・墓標
- 第九夜・街角
- 第十夜・雨

## 第一夜・緑の森にて

こんな夢を見た。

私は深く静かな森の中を、ひとりの背の高いすらりとした少女とともに歩いているのだ。午後の陽光に照らされた緑は萌えるように鮮やかであり、そこに在る生命すべてが確かな躍動を感じさせた。

それはどうやら夏のようらしく、少女はまっしろな半袖のワンピースを身につけている。頭には同じ色のつばの広い帽子。そこに飾られたレモン色のリボンが腰のあたりまで伸ばした黒髪の半ばまで垂れてすばらしいコントラストを形成している。ほっそりとした素足にじかに履いているのは赤いハイヒール。そんな街中を散歩するかのような格好で、少女は私の傍らを歩いているのだ。

どのくらいそうして歩いてきたであらうか。少女が不意に走りだした。まるでその森を棲み処とする妖精であるかのような軽やかさで。それは私から逃げているという風情かとも思われた。

逃げていく。そう、確かにそうだ。それも、追いついてはらんないともいえない。

うに時おりこちらを振り返りながら。私はといえば、その時になつてやっと少女が自分の恋しいひとだと気がついたのだ。少女を追って走りだす。



木の根にトールをつまづかせはしないかという私の不安をよそに少女は舞うように走る。彼女の銀の鈴を振るような笑い声が風に乗って聞こえる。もう少しでつかまえられるのではないかと思える距離に何度もとらえながら、どうしても衣の端に触れることすらできない。もっともその時にはすでに、そんなことはどうでもよくなっていたのだ。ただ、心楽しいその時間がいつまでも続けばよい、それだけを考えていた。

そうしているうちに、少女と私は森を抜けて視野の広がりを得た。地平の彼方まで見渡せる一面の草原、そこに小川のせせらぎがある。水は清く澄んでいて、玉のような小石が陽光にきらきらと輝いているのが水底に見える。せいせいくるぶしのあたりまでを濡らすほどの深さしかない。

少女はトールを脱ぐと左の手にそれを持ち、両足をそのせせらぎの中にひたした。そしてあなたもおいでなさいよというように私の方を振り向き、帽子を空に抛った。

その時になって初めて私は少女の顔を正面から見たのであるが、それが誰なのかまったく判らないのである。とてもなつかしい親しい人であるのは間違いないのだが、呼びかけようにも私は彼女の名を知らないのだ。

少女はといえば、当惑顔の私をよそにあいかわらず水辺に戯れている。

草原を渡る風が彼女の黒髪を靡かせて攫っていく。

水沫があがる。

背後では通り抜けてきた森の木々のざわめき。

その一枚の絵画のような風景の中で不意に私は理解していた。確かに少女は私の恋人なのだ。ただ、現実においてまだ知り合っていないのだな、と。

## 第二夜 月の夜

こんな夢を見た。

どこだか判らないのだが、とにかくとても長い土手にそって歩いていく。

河ぞいであるらしいのだが、暗すぎてよくは見えない。

ただ、流れの音がするからそんなのだろうと思うだけなのだ。それらしい虫の音などもするし、遠く牛蛙なども鳴いている。

振り返ってみると、背中を青白い色の月が追いかけてくるのが見える。

無論、満月だ。

なぜ満月でないとならないのかは釈然とはしないけれど、とにかくそうでなくてはならない。そのことだけには妙な自信がある。

とにかく、そのようにして、私はどんどん歩いている。けれど、いくら歩いても歩いている風景はいつかな変わりはしない。土手はどこまでも続いていく。

私の足はもう棒のようになってしまっている。

でも、どんなに疲れようが立ち止まることは許されていない。歩き続けなければならぬのだ。

なぜ、そうしなければならぬのか、これもまた釈然とはしていない。けれど、止まれば何か恐ろしいことになる、そんな気がしてくる。

あまりの辛さに、歌でも口ずさんで気を紛らわせようかと

考えたが、自分の喉から出てきたのは何ともいえず暗くて陰気な旋律であった。

ひとつ、人気のない森は  
ふたつ、震えて通るなり  
みつつ、水辺に咲く花は  
よつつ、黄泉よもつのものなるか  
いつつ、異郷さまよに彷徨える  
むつつ、虚しき者なれば  
ななつ、無くした肉体からだゆえ  
やつつ、闇夜のその中で  
ここのつ、恋しく泣き濡れて  
遠く想いを馳せるなり

このような歌を繰り返し歌いながら私は歩いていく。  
さてこれはどいつのどいつとなのだらうか。  
私はすでに死んでしまったのであろうか。  
判らない。

どいつにも判らないのだ。  
ただ、青白い月の光を浴びながら、私はどこかに歩いていくのである。

またも、自身のかすれた声。

ななつ、無くした肉体からだゆえ…。。

答えるかのよつに、遠く牛蛙の鳴く声があった。

## 第三夜・図書館

こんな夢を見た。

熱く焼けたコブクリートの階段を登ると、古びた今にも崩れ落ちそうな木造の建物が見えてくる。

よく知っているところだといつ気がしてならない。

はて、ここはどこだったろう。

不思議に思っ、もっと近づいてみた。

建物は木造の二階建てで、一階には誰もいる気配はない。

窓なども破れてしまっていて、さながらお化け屋敷といったところだ。

私は二階へ昇っていく。

ほごりのたつとこぼろびろ腐っている廊下を歩いて進んでいくと、なんとなく心魅かれる部屋がある。

扉を開いて中へ入った。

そこには古びた本の山があった。

しかも、尋常ではない種類のものばかりだ。あらゆる国、あらゆる時代の白魔道や黒魔道の書物が細大もらさず集めてある。

そして、その中には、「死霊秘法」<sup>アル・マジフ</sup>、「象牙の書」<sup>エイボン</sup>、「無名祭祀書」<sup>ネームレスカルツ</sup>などといった実際にはありえないような書名さえもが混じっているのだ。

それらの何と靈惑的なことだろう。

私は時間のたつのを忘れて、それら禁断の書物を読みふけた。

「この世のことならぬ真実を知った者にどのような罰が下されるのであろうかと恐れながら。」

「ここまで私を追いつめたのはおまえなのだぞ。」

「ここまで私を追いつめたのはおまえなのだぞ。」

「この間にやらそう呟いていぬ。」

「いたいおまえとはだれなのか。そしてどこに追い詰められたらいいのか。それが自分自身わけが判らずに不安でならぬ。」

ただ、これらの書物を早く読んでしなわなければならぬといつ焦りと恐怖にせかされている。

なぜ、もう読むのをやめない。

ここまでできてやめられるものが。

相反するふたつの心の声

「この間にやら額ははぐしりと汗。」

手の甲でそれをぬぐうと、立ち上がる。

息苦しい。窓を開けよう。

陽光のさし入る窓辺に近寄り、開く。

すると、吹き入った風で本のページがめくれた。

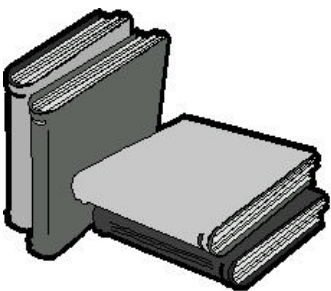
窓から首を出してのぞく。

焼けつくコンクリート。

赤い鞆がひとつ、ポツンと転がっているのが

見える。

もう、読むのをやめようと思った。



## 第四夜・鏡

こんな夢を見た。

ぼんんとひとりきりで暗い部屋の中に佇んでいる。

目の前には私より数十センチは高さのある楕円形の大きな鏡がはめこまれている。縁どりは白い大理石で二匹の蛇が絡まりあっている彫刻が施されており、ちょうどいちばん上の部分で交叉した鎌首は下のほうへ向かって伸びている。一方の蛇にはサファイア、もう片方には紅玉石が双眼にはめこまれていて、まるで生きているかのよう<sup>に</sup>にめりとした感じがする。

私は何も喋りもせずじっとその鏡をのぞきこんでいるのである。

トロイメライ

どのくらいそうしていただであらうか。私は虚像にある変化が起こしていることに気づかずにはいられなかった。

年をとっている。

鏡の中の私は明らかに目に見えて年老いていた。

おお。

顔に皺が増え、頭は白くなりつつある。

腰もどんどん曲がっていく。

それでも私はなす術もなく立ちすくんでいるのだ。

たまらない、胸をしめつけられるような感じがした。

虚像はなお加速度を増しながら崩れていく。

皮膚はぼろぼろになり、髪はぞろりと抜け落ちた。着ていた

衣服は既にちぎれさり、裸の体に骨が浮いている。

いや、見る間に体の肉が腐れてさえいくのである。赤黒い内臓が肋骨の間からはみでていく。

眼球も抜け落ちた。

すべては塵に。

すべては塵に。

いつの間にかやらそう呟いてくる。

言葉通り、鏡の中の私はもう人としての形をなしてはいなかった。

それでも、なにやら震えるように蠢いている。

そこにあるのはただの肉塊。その中を何かが這いずりまわる音がする。

蛆。あるいはもっと別の屍食者。

こみあげる嘔吐感、そして恐怖。

あれは虚像だ。

あれは虚像だ。

そう自分に言い聞かせている。その証拠にここにうつして何の痛みもなく立っているではないか。自分の体を確かめるように探ろつとする。

ない。

なにもない。

鏡像ではない自身を見下ろしたけれど、そこにはただ無のみが存在していた。

いまだに「あれはほんとうのことだ。

すべては塵に。

すべては塵に。

もう、鏡のあちらにも、そしてこちら側にもなにもありはしない。

その時初めて、時間といつものがほんの少しだけ理解できた気がした。



## 第五夜 人形

「こんな夢を見た。

どうやら、座敷にすわっているらしい。

暗くて、よくは判らないのだが、とにかく畳の匂いがする。

蘭草の香りが、ほんのりと黴臭さを帯びている。

何かに押さえつけられるかのような、あの古い座敷に特有の  
圧迫感が、そこには満ちていた。

闇に潜みながら、私の身体に忍び寄りてくるようだ。

深く吐息をつき、耳を澄ませる。

遠くから、ひそひそと人の話し声がする。

客人はお待ちかえ

控えの座敷にて」

「そろそろじゃえな

「そろそろじゃえよ

「姫君もお待ちにて」

「おお、そつともよ

「迎えには黒童子をやるかえや

「こそよからうしよ

それらの声は、時にはぶくみ笑いなどしながら、何やらを相  
談しているらしい。

そのうちには目も慣れへくるよ、じよじよにはあるが辺りの  
様子もつかがえてくる。

どじやら、三方は壁、正面は襦であるらしい。

黒檀の棹に白一色のみの襖紙。絵などは何も描かれてはいな

い

そして、闇に浮かぶ能面。

右手の壁には小面こおもて、そして左手には般若はんにや。

他には調度とて何も無い。

どこからか時計の振子が時を刻む音が低声で精確に聞こえてくる。

それに合わせて、ひそやかに鼓動を打っている私の心臓。

私はしだいにその座敷の重苦しさ耐え切れなくなっていく。姿勢を崩すこともなく正座を続けているので、足はもはや感覚を失ってしまったようなものだ。

それでも私はじっと待ち続けている。

何を？

それは、私自身にも判っているわけではない。ただ、私は待つことだけを強いられている存在なのだ。

じっと襖だけを見つめている。

時が永遠に近いくらい過ぎ去るまで。

すると、そのつちに音もなく襖が左右に開かれた。

奥から姿を現したのは、みっくらいのだげな顔をした少年である。

少年は私に向かって一礼すると次の間を指し示した。

間いかけるように見つめると、少年は微笑して頷いてみせた。

私は立ち上がると少年に案内されるままに次の間に入った。

痺れ切った足はまるで宙を歩いているような、雲を踏んでいるかのような感じだ。

隣の間は、座敷と二つよりは畳を敷きつめた長い廊下といっ

た感じてあつた。

どこまでも、どこまでも奥へ続いている。

少年は私に左右を見るようにと、しぐさで示した。

そこにあつたのは……。そこにあつたのは、私の背の高さと同じくらいの木棚に飾られた無数の雛人形であつた。

座敷の両側の棚いっぱい飾られた雛人形たちは、どれも女雛である。

そして、不思議なことにきらびやかな衣装をつけた彼女らは皆、顔を背けていた。美しい眉は悲しみに歪められ、瞳は何かを拒否する色合いに染まり、口元は苦痛に歪められている。

黒童子よ、客人は御到着かえ」

雛人形の列の向こうから、そのよつな声がした。

「はい、姫様がた」

答えた少年の声は、そのあどけない顔とはあまりにもかけ離れた老翁のものであつた。

その何と無気味なことか。

私は何ともいえず恐ろしくなつて、あとずさりした。

「客人よ、妾たちが顔をそむけているわけが判るであろうな」

まどわりしくよつに、ふたたび声がする。女雛たちの声であることは、もはや明白だ。

「判らぬと申されようか？」

笑い声。

「さて困ったことじゃ。こちらを向かれるがよい。そして妾たちをその腕に抱かれるがよい。さすれば、思い出されるであろうよ」

人形たちの誘惑の何と抗いがたいことか。

その誘いは、艶やかな響きさえ宿しているのだ。  
私は雛人形の列と、いつか引き寄せられていく。  
逃れるすべのない呪縛。  
それは、私がこの夢の中にいる限り、逃れることのできない呪  
縛なのだ。  
そう、永遠なる……。



## 第六夜 仮面劇

こんな夢を見た。

あふれるほどの光に満ちた場所で、ゆるやかな着物をまとった人々が、舞い踊るように歩いている。

空は碧。

大地は緑。

そして耳には快い音楽が聞こえる。

何もかもが、平和の色どりを帯びているようだ。私もいつしか彼らのもとに魅せられたように近づいていく。

あたかも、そこに至福の時間があるかのようにな、一歩、また一歩と。

トロイメライ

しかし、いつしか私は歩みを止める。

それは、私が彼らのほんとうの姿に気づいてしまったからなのだ。

ああ。

彼らの顔を覆っているのは何なのだろうか？

仮面。

いや、ぴったりと皮膚にはりついたそれは、仮面と一つにはあまりにも生々しいものであった。

さまざまな表情がそこには描かれている。

ほほえみ  
微笑  
いたみ  
苦痛  
よろこび  
歓喜

立腹。  
いかり

そして悲哀。  
かなしみ

しかし、それらの表情はどれも虚ろだ。

誰も自分のほんとうの表情は見せてはいない。まるでかまわない演技者のように、彼らはそれを隠しているのである。

どうしてっ？

判らない。

だが、そうして彼らを眺めているうちに、ひとりが私のほうに近寄ってきた。

指先で私を招いている。

自分たちの列に加われといつかのようだった。

私は拒否した。

すると、私の腕をつかんで、無理にも引っ張って近づこうとするのである。

思わずその手を振り払う。

無表情な仮面演技者の列に、私は加わりたくはないのだ。

いつしか、私の周囲には彼らが集まっている。ただ、沈黙のままに。

いやだ。

いやだ。

私は彼らから逃げ出そうと走る。

じよじよに狭くなっていく輪。

見えない力にからめとられていくかのようだ。

逃げ場がない。

思わず、彼らのひとりに掴みかかる。

ただ、恐怖から、やみくもに。

揉み合っているうちに、私の手は偶然、彼らの仮面を掴んでいた。

剥ぎ取ってやる。

私はそう決心すると、ひとりの顔から仮面を筆りとっていった。

ああ、何といついことだ。

仮面の下はただの空洞だ。

暗闇が巢食っているだけなのだ。

何ともいえない不安に駆られ、次々に私は彼らの仮面を剥ぎ取っていった。

だが、その下に自分の顔を持っている者はひとりもない。

仮面を剥ぎ取られた人々は、存在することをやめ、消えていく。

そして、音楽もまた。

いや、どちらも、最初から存在していなかったのかもしれない。

あとには、ただ空の碧と大地の緑だけが残った。

## 第七夜 夜汽車

こんな夢を見た。

私は旅に出ようとして、駅のプラットフォームにひとり佇んでいる。

夜のプラットフォームだ。

冬の初めであるらしく、吐く息が少し白い。

どこに旅に出ようとしているのかは判らない。手にしている茶色の皮張りのトラングはよく使い込んだものであるもので、しっくりとなじんでいる。

きつと、私は長い旅を続けてきたにちがいない。そして、これからもこの長い旅は続くにちがいない。

これから出ようとしている旅も、旅の終わりと始まりをつなぐ、そんな途中経過の旅路のひとつなのだろう。

もうすぐ、プラットフォームには列車が入ってくるはずだ。洒落た列車ではない。夜汽車にふさわしい昔ながらのもので、座席はきつと木製にちがいない。窓からは、冷たい隙間風が吹き入るだろう。

そんな列車を選んで旅をしてきたような気がする。

けっして気楽な旅というわけではなかったが、苦しみだけが多かったというわけでもない。

結局のところ、誰でもが旅している、そんな旅路のひとつを私もたどってきたにすぎない。

プラットフォームを白く照らしている誘蛾灯が、じりじ

りと音を立てている。その向こう側を見ると、夜の暗闇が広がっているだけで、星さえも見えない。きつと、もうすぐ雨になるのだらう。

私は、列車を待ちながら、煙草に一本火をつける。

長く吐き出した煙が、空に消えていく。

まだ、列車は到着しない。

他に待つ人のいない駅は、まるで無人駅でもあるかのよう  
に、静寂に包まれている。

でも、これから乗ろうとしている列車には、何故か親しい人  
が乗っているような気がする。

列車を待つときに、そんな不思議な気がしたことが、あなた  
にはないだろうか。私は今、そんな気分なのである。その誰かと  
巡り合うためにこの長い旅を続けてきたような……。

もし、そうであるならば、これから旅は今までと違ったも  
のになるはずだ。

やがて、遠い汽笛とともに私のもとに現れるであろうその人  
のことを、私はこのプラットフォームで待つつもりである。

その人がこの列車に乗っていなくても、しかし私は失望した  
りはしない。駅に降り立つたびに、しばらくその人をまた待つで  
あるらう。いや、もしかしたら、その人はどこか別の駅の、やはり  
このようなプラットフォームで私を待っているのかもしれない。

まだ、列車は到着しない。

## 第八夜・墓標

こんな夢を見た。

どんよりと曇った、今にも雨が降りだしそうな空の下を、私はゆるやかな丘をのぼっていく。

秋なのだろう。黄色くなった葉が、丘の上のポプラの木から舞い落ちていく。

数本立ち並んだポプラには、ほとんどもう葉が残ってはいない。まるで、何体かの骸骨が、無気味に絡まりあっているかのようだ。

丘の上にあるのは墓地である。

西洋墓地だ。

さまざまな意匠をこらした墓標が整然と並んでいる。古い年代が刻まれたもの、ごく最近のもの、長い年月を生きた人のものもあれば、短命に終わった人のものもある。

私はそれらの間を通り抜け、やがてひとつの目立たない墓標の前で足をとめた。

それは、よく知っている人のようでもあり、まったく知らない人のもののようにも思える。

ただ、私がそこに花を供えにきたことだけは確かである。私は、この墓地にはひどく不似合いなようにも思える華やかな花束を手にとってくるのだ。

紅色の花でつくられた花束なのだが、私にはその花が何という名前であるのかが判らない。

どいつでもいじやうのやうに思える。

墓前にその花束を置くと、私はこれからどいつすればよいのか

判らなくなってしまう。祈りを捧げるべきなのか、それとも泣き崩れるべきなのか。

判らないまま、私はそっぴんちんくしているのだ。

そして、やがて私はその墓標に、今まで気づかなかった文字がほんの一行だけ薄く薄く刻まれていることにやっと気づくのだ。

「ソッピン少年の日々を葬る」と。



## 第九夜 街角

その人のことを目にするのは、いつも街中の雑踏にまぎれて  
だ。

後ろ姿しか見えない。

どこかに急いでいるように、小走りで私の視界をほんの少し  
だけかすめるようにして横切っていく。

その人は、いつも違う姿で私の目の前に現れる。ある時は会  
社員風の男性であり、ある時は幼い少女であったりする。知人  
の姿をしている時さえある。一度などは、私の両親の姿をして  
いたことさえある。

それでも、街角に佇む私の目の前をその人が通り過ぎる時、  
「その人である」ということが私には判る。これは大事なこと  
だ。

なぜ大事であるのかは判らないのだが。

私はその人に声をかけたことはない。

不安があるのだ。

声をかけた途端にその人がその人でなくなってしまうよう  
な。

その人は、私の目の前を通り過ぎるだけの「客人」まろしゅとなのか。  
いや、そんな筈はあるまい。

私は、その人のことをよく知っている気がする。

緑に輝く森の中で出会ったような。

月に照らし出された細道の彼方に訪ねたような。

古びた図書館の一室で待ち合わせをしたような。  
覗き込んだ鏡の中に見つけたような。  
黴臭い暗い座敷でいつまでも待っていたような。  
仮面の下に隠されたその素顔を垣間見たような。  
夜のプラットフォームでいつまでも待ち続けたような。  
その人の墓前に詣でたことがあるような。

ああ、まただ。

その人が来た。今夜は女性の姿をしている。茶色のロングコートに身を包み、ほんの少し小走りに、私の前を通りすぎていく。

今は冬なのだろうか。

女性の手にはコートの落ち着きには不似合いなピンクの毛糸で編んだ手袋がはめてある。

私は決心して声をかけることにする。

そっだ、よく知っている名前のはずだ。

よく知っているはずの名前なのだ。

ヨウ・シツ・テイル……

「もしもし……」

## 第十夜・雨

こんな夢を見た。

雨音が聞こえる部屋の中でひとり珈琲を飲んでいる。

でも、もしかしたらこれは空耳で、ほんとは雨なんか降っていないんじゃないだろうか。

そう、思いながらも、窓の外を確かめてみようとは思わない。ただ、珈琲の芳香を楽しんでいる。

雨音は絶え間なく、夜もまた長い。

急ぐことなど何もないじゃないか。

夢の中の私はそう思っているのだ。

トロイメライ

